

鴨

東

通

信

冬

2014.12 No.96



● 日常語のなかの歴史10

むじゅん【矛盾】

近藤好和

● ていーたいむ

装飾とリアリティ——響きあう琳派の美

河野元昭

● 新連載 万博がもたらしたものの1

メタボリズムとカプセル・ホテル

橋爪紳也

● エッセイ

伝統社会の識字・学び・リテラシー

大戸安弘

陰陽師が使う式神の実態をめぐって

山下克明

● 史料探訪 58

百万塔と陀羅尼

辻本直彦

琳派——響きあう美

河野元昭著

▼A5判・八五〇頁／本体九、〇〇〇円

日本美術史研究の泰斗、河野元昭氏による琳派研究の集大成。光悦・宗達・光琳・乾山・抱一・其など、琳派と呼ばれる芸術家たちが互いにどう影響しあい、独自の美を生み出してきたのか。今もなお人びとを魅了してやまない才能あふれるクリエーターたちの実像に迫る26篇。

内容

- 〔I〕
- 第1章 光悦試論
 - 第2章 宗達関係資料と研究史
 - 第3章 養源院宗達画考
 - 第4章 宗達における町衆の性格と室町文化
 - 第5章 宗達から光琳への変質
 - 第6章 宗達金銀泥絵序説
 - 第7章 琳派の主題——宗達の場合
 - 第8章 宗達と能
- 〔II〕
- 第9章 光琳水墨画の展開と源泉
 - 第10章 光琳大傑作の源泉と特質
 - 第11章 尾形光琳と大坂
 - 第12章 光琳と能
 - 第13章 光琳水波試論
 - 第14章 光琳と津野家
 - 第15章 光琳と乾山
——山根有三先生の墓前に捧ぐ——
 - 第16章 渡辺始興筆「真写鳥類図巻」について

- 〔III〕
- 第17章 乾山の伝記と絵画
 - 第18章 乾山と定家
——十二か月花鳥和歌の世界——
 - 第19章 乾山と光琳
——兄弟逆転試論——
- 〔IV〕
- 第20章 抱一の伝記
 - 第21章 抱一の有年紀作品
 - 第22章 光琳百図の基底
 - 第23章 抱一筆 十二か月花鳥図考
 - 第24章 抱一筆 十二か月花鳥図に
おける和と漢
 - 第25章 酒井抱一の芸術
——微光感覚を中心——
 - 第26章 鈴木其一の画業

〔2月刊行予定〕

この・もとあき……一九四三年秋田県生。京都美術工芸大学学長・東京大学名誉教授・元「國華」主幹。

風俗絵画の文化学Ⅲ

松本郁代・出光佐千子・杉子女王編

〔12月刊行〕

▼A5判・四三四頁／本体七、〇〇〇円

「風俗絵画研究会」の文化学的探求の研究成果をまとめたシリーズ第3弾。

「内容」
瞬時をうつすフィロソフィー 出光佐千子
第1部 東西のエクリチュール 宮下規久朗
食事の情景 呉 孟晋
まなざし 中野慎之
近代日本画肖像考
第2部 美のメディア 倉橋正恵
幕末風刺画の中の役者評判絵 中野志保
上方役者絵における中判普及の背景 宮崎もも
円山派の美人画の展開 館野まりみ
出光美術館蔵「桜下弾弦図」をめぐるいくつかの問題
第3部 演出のメカニズム 松本郁代
「古今和歌集」注釈にみる秘説の視覚性 松本直子
「打出」 吉住恭子
「吉祥画」としての四季耕作用 松本直子
第4部 信仰のプラットホーム 森 道彦
狩野元信「釈迦堂縁起絵巻」(清涼寺)の制作をめぐって 米倉迪夫
四天王寺図についての覚書 下坂 守
サントリ―美術館蔵「日吉山王祭礼図屏風」に見る中世の日吉祭



むじゅん【矛盾】

私の専門とする武器に関わる日常語のうちもつとも普及しているのは、中国戦国時代に韓非（？〜前二三三）が著した『韓非子』（難二）を典故とする「矛盾」であろう。楚國（？

〜前二三三）の盾と矛を売る商人が、この盾はどんなものでも防ぎ、この矛はどんなものでも突き通すといった。ある人がその矛でその盾を突いたらどうなるのかと聞くと、商人は答えに窮したという。これが「矛盾」の由来である。

日本中世では敵対・争い・戦い・喧嘩等の意味だが（『日葡辞書』）、現在では辻褃が合わないという意味で使用する。この「矛盾」の由来は著名である一方で、「矛盾」

が武器に関わる言葉であることを意識している人は多くなろう。まして矛と盾がどのような武器かを知っている人は少ないと思う。

矛は長い柄の先に無反り・両刃を基本とする刀身を取り付けた世界的な攻撃具。弓箭に先行して成立した。日本語では「ほこ」と言い、対応する漢字は鉾・槍・棒等もある。主

日常語の歴史

10

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

に古代で使用され、古墳時代の銅矛は有名だし、正倉院には三三口（うち一三口は刀身に鎌状の枝が付設）が現存。中国では鉾・稍等もあり、漢字ごとに種類が相違し、刀身も無反り・両刃に限らない。ヨーロッパにも多様な「ほこ」がある。なお、「ほこ」は鎚と誤解されることが多い。しかし、鎚

は「ほこ」とは異なる日本独自の攻撃具。一四世紀に成立した。

盾も世界的な防御具。甲冑に先行して成立した。楯とも表記する。材質は木製・金属製・皮革製等とさまざま。また、携帯型の手盾（持盾）と設置型の置盾（垣盾）がある。前者は小型で左手に持ち、右手には「ほこ」等の刀剣を持つ。後者は大型で弓箭や鉄炮等の飛び道具用。

「矛盾」の「盾」は手盾。日本では手盾は弥生時代にあり、『和名抄』巻一三に「歩楯」がみえ、『法然上人絵伝』（知恩院蔵）巻一・第四段に一例管見できるが、他はもっぱら置盾のみ。「矛盾」は中国由来の言葉のため、背景にある武器も日本の実状とは相違するのである。

（近藤好和・國學院大学兼任講師）

■芸術と宗教が融合するシャングリラ

——平成二十七年（二〇一五）は、本阿弥光悦たかみねが鷹峯に光悦村をつくって四百年になります。京都では、官民あげて「琳派400年記念祭」が展開されているところで、これから盛り上がっていくと思います。先生の光悦村についての考え方を教えてください。

皆さんご存知のように、光悦村は元和元年（一六一五）に本阿弥光悦が徳川家康から鷹峯の地を拝領して、町を開いたものです。その跡は光悦寺となつて光悦のお墓があり、昔の雰囲気を残しています。

今は洛中といつてよい場所ですが、光悦の孫である光甫らが書いた『本阿弥行状記』を読むと、当時あの辺りは辻斬りや追剥ぎが出るような所だったそうです。そうすると、なぜ家康がそういう土地を与えたのか、ということになるわけです。

それについては、林屋辰三郎先生が昭和三十九年（一九六四）に出された『光悦』（第一法規出版）の中で、まず一つに、出版事業に関心を持って伏見版や駿河版を版行した家康が、嵯峨本に深く関わった能書家光悦に対し尊

ていーたいむ

装飾とリアリティ

——響きあう琳派の美——

このもとあき
河野元昭

(京都美術工芸大学学長)

かわさき ひろし
聞き手 **川崎 博**
(美術史研究家)

敬の念を抱いていたことであるとしています。そしてもう一つには、家康は今でも危険な危険視する思想を持ち、光悦についても危険な人間だと思つて、所払いしたのではないかというのが、林屋先生の見解です。私は後者の側面がまずあるのではないかと思っています。しかし、それは家康側からの見方であつて、光悦の中にも新しい空間をつくりたいという気持ちがあつたのだと思います。これを実証するのはなかなか難しいのですが、『本阿弥行状記』を読み込むと、その思いを強くします。

光悦村がどういう村であつたのか。それにも二説あつて、一つには芸術家村だと言われます。佐藤良氏が『光悦の芸術村』（創元選書、一九五六年）で、十九世紀後半イギリスで活躍したウィリアム・モリスに光悦をなぞらえ、産業革命後、工芸品が機械化されるなかで手仕事の美しいものを使って生活しようとして設立されたモリス商會を光悦村と結びつけました。

それに対して林屋先生は、あれは芸術家村ではない、法華信徒の法華村だという説を出したのです。言われてみるとたしかにそうで、村内に法華寺院が四つも営まれています。その後は

法華村だというのが定説になって、芸術家村だという人は少なくなりました。

光悦はいうまでもなく法華信徒で、宗達も光琳も、そもそも狩野派も長谷川派もみな法華信徒なのです。しかし、信仰の対象はお題目といわれる「南無妙法蓮華經」の文字そのもので、厳しく偶像を否定する法華の宗徒が、なぜあのような芸術品をつくったのか。最大の謎ですが、あえていうと、法華宗には非常に自由の気風があるので。『本阿弥行状記』に「家父光悦は一生涯へつらひ候事至つて嫌ひの人にて」という有名な一節がありますが、そのすぐあとは「殊更日蓮宗にて信心あつく候故」と続きます。法華信徒で自由、阿諛追従や媚びへつらいを嫌ったことが、芸術をつくる上で、非常に良かったのではないかと思います。

法華宗が権力に媚びへつらうことを非常に嫌ったというのは、日蓮の生き方がその通りですね。日蓮の思想のなかに「浄仏国土」というのがあります。それは仏国土を浄化するという意味にもとれるし、浄い仏の国土だという二つの説がありますが、光悦は日蓮の「浄仏国土」というのをあそこで実現しようとしたのではないのでしょうか。芸術と宗教とが融合するシャングリラ、理想郷をつくろうとしたのではないかと思っています。

■天平の写経所から宮崎駿まで

——本阿弥光悦と角倉素庵が刊行した、主に木活字を用いた書籍群は、料紙や装幀に創意あふれる華麗な意匠を施した、光悦の総

合芸術の精華で「嵯峨本」と呼ばれます。この嵯峨本の活字の版下を誰が書いたのかについては、今も議論が続いています。先生は、嵯峨本の筆者について、工房論を展開されていますね。

嵯峨本の筆者が光悦ではないというのは、はじめは能楽研究の方面から出てきた説です。嵯峨本の字の流れに節付があつて、こういったことはプロでないといけないので、観世黒雪が書いたのだらうというものです。ほかに、角倉素庵説があります。

私は以前、字母表をつくつて光悦と黒雪と素庵とを比較してみました。字母表も絶対ではありませんが、素庵という可能性はなけれど観世黒雪の可能性は一応あるように思いました。しかし、筆者を一人にするのは難しいだろうというのが私の考えです。それは私が言い始めたことではなく、小松茂美先生が『光悦』（前掲林屋編）の中でちらつとにさせています。実際問題として、あれほど多くの版下となる字を書くというのはあり得ないわけです。それではたと思い当たったのが写経所です。天平時代に中国からお経がもたらされたときは、写経生がお経を写して流布したわけです。その写経生の上に題師という人がいたと、石田茂作先生の研究にあります。題師というのはお経のタイトルの書いたのでしよう。さらに面白いことに、写経所には装潢師という装幀をする人もいて、光悦本についても同じように、光悦の周りには紙屋宗二や筆屋妙喜という装潢師のような人がいた。つまり、版下の字を書く写経生のような人たちの上に、光悦という題師のような人がいたのだらうと思いついたわけです。

金銀泥下絵に書かれた光悦流の文字は素晴らしいですが、私が見るところ光悦流は御家流と同じで、美しいけれど決まったパターンがあり、すこし慣れればすぐ読めるような字なのです。それを書き写す人がたくさんいて、書いた文字を木活字に彫って、印刷して、写経所の題師のような光悦がまとめたのでしよう。あの龐大な量を光悦でも黒雪でも素庵でも、ひとりて書くことはできず、写経生がいて、まとめ役の光悦がいて、パトロンの素庵がいて、何といつても謄本が多いですから黒雪が関与して作ったと。そういうものではないかなと思います。

宗達も酒井抱一も鈴木其一もそうで、かのエキセントリックな伊藤若冲にも工房があったでしょう。工房については、現代の例を見ればわかりやすく、さいとう・たかをの『ゴルゴ13』や宮崎駿のアニメ作品など、彼らはプロデューサーであり、またディレクターであって、みんな手分けしてやっているわけです。さいとう・たかをもゴルゴ13の顔は自身が描いているが、あとは弟子が描いていたりする。嵯峨本にしても一種の工房論、写経所のようなものを考えれば理解しやすいと思います。

——工房論には、浪漫的芸術家論からの卒業という大きな意義があると思います。しかし一方では、何でもかんでも「工房作」で済ましてしまうのもどうかと思います。そのあたりも先生は論文の中で、「工房論の陥穽」として警鐘を鳴らしておられますね。

工房というのはたしかに便利ですが、美術史家であれば出来の

良いものと二番手のものとを直感的に区別する能力がないとまずいでしょうね。かといって良いものは真筆、悪いものは偽筆と二分してしまうと、実態とは明らかに違ってきて、日本美術史はやせ細ってしまうと思います。

■ユーモアの感覚

——俵屋宗達についてお伺いします。王朝美術や中世（室町）のやまと絵との関連をおっしゃっていますね。

よく知られているように、宗達は、慶長七年（一六〇二）に福島正則が発願した平家納経の修理に参加します。現在では、宗達の表紙・見返し絵や蔦蒔絵唐櫃ばかりが補修の成果のように見なされていますが、実際は、全三十三巻にわたる表具の締め直しが主目的でした。このときに宗達は、この王朝美の粋をじっくり鑑賞することができたに違いありません。実際、後年の「松島図屏風」（フリーア美術館所蔵）の左隻の奇妙な浮島の形態は、平家納経「授記品」の表紙・見返し絵からとっています。それ以外にも、意匠感覚や装飾技法など、平家納経からの影響を宗達作品のいたるところに見いだすことができます。

それだけではなくて、直前の室町時代のやまと絵、和画系から学んだのももちろんです。たとえば京都・養源院の松図は、現在東京国立博物館所蔵の土佐光信の「松図屏風」を見てからでない、あれだけのものは描けません。

それにしても、現代人が感動するのは襖絵の松より、どうして

も白象・唐獅子・麒麟を描いた杉戸のほうですね。たしかにあれは素晴らしい、見れば見るほど。狩野派も描くし、長谷川派も描きますが、宗達のもが素晴らしいのはなぜでしょうか。一つにはフレームがはつきりしています。意匠デザインとリアリティが渾然一体となって、デザインのだけどもムーヴマン（動き）が感じられます。そしてもう一つは、宗達にはユーモア、諧謔味が感じられるということです。「風神雷神図」をとってみても、風神や雷神というのは、本来は人に災いをなすおつかない存在ですが、宗達の「風神雷神図」には、見ると思わずにっこりしてしまうユーモアの感覚があります。

■装飾は絵画の本質

——一般には琳派の特質として「装飾性」がいわれます。しかしこの言葉も、突き詰めて考えてみるとよくわからないところがあります。琳派の「装飾性」とは何なのでしょう。

美術史の世界では、装飾という言葉のみ嫌います。それは、装飾というと表面だけを飾って内実がない、本質は空疎であるという感じがあるからでしょう。装飾はそもそも漢語なので、日本美術を説明するにはそぐわないという意見もあります。辻惟雄先生はやまと言葉で「かざり」と言っています。「かざり」というのは、装飾の置き換えだけではなくて、風流だと



か一過性のものも含んでいると言います。

また、琳派の特質は装飾性だと言ったのは西洋人だから、装飾という言葉を使つてはダメだという説があります。日本人は身近にある琳派の作品を装飾的だなどと思わないけれど、西洋人が「あれはデコラティブだ」と言つたというのですが、そんなことを言つていては浮世絵の研究はできません。日本人が気づかない美に西洋人が気づくというのは十分あるのです。いずれにせよ西洋人が言い出したからダメだというのはナンセンスですね。

日本の絵画自体がひじょうに装飾的なものだというのは、何も私が言い始めたことではありません。中国・宋代の徽宗皇帝が集めた宮廷収蔵コレクションに『宣和画譜』という目録があつて、そこに日本の絵画は「観美」と書いてあります。観美、つまり観てきれいだということで、これは日本絵画が装飾的だと言っているわけです。観美という言葉の中には、観て美しいだけという意味が含まれていて、中国の山水画がもの本質、真を写そうとしているのに対し、日本の山水画は美を写そうとしているというわけです。漢民族の目には、日本の山水画には、ある意味、装飾性が見えるということを表しています。

私は装飾性というのは、絵画全般にわたつて本質的な部分だと思つています。とくに琳派にはふさわしくて、なぜかという、装飾という

ことばの「装」には「衣」の字が入っているからです。宗達は蓮池の唐織屋の出の可能性があり、尾形光琳は雁金屋という呉服商の出身です。ともに衣に関係します。酒井抱一は殿様の弟だからとくに染織とは関係ありませんが、鈴木其一のお父さんは江戸紫の染めの家から出たと史料に書かれています。実際は琳派だけではなくて、長谷川等伯の家も染物屋、浮世絵の菱川師宣も千葉の保田の縫箔の家から出ているし、曾我蕭白も伊勢の紺屋の出だという説があります。一流の画家の多くが染織の家から出ているということとは、日本の絵画が工芸的であることと関係があります。

それに装飾の「飾」の字も、右側の旁は、人が布で手をぬぐってきれいにするという、ピユアなことを示している字です。琳派の絵もピユアの要素がひじょうに強いですね。光琳のかの「燕子花図屏風」にしても、燕子花のピユアな部分、本質だけを描いて余分なものは一切描かない。これがまさに装飾です。

日本人は、琳派には哲学があるのだ、日本の精神があるのだと一所懸命言いたいところでしょうが、そんなことを言う必要はないのです。装飾性があるというのは絵画の本質であって、絵画の独立性があるということの意味しているのです。美を加えて生活を豊かにするというのは日本人が古代からやってきたことなのでから、それを卑下する必要はないというのが私の説です。

■現実世界への強烈な関心

——リアリティについて指摘されていますね。

装飾というどうしても表面だけを飾るといふのは否定できません。しかし、琳派には、装飾性だけではなくてリアリティもあると私は言いたいのです。たとえば燕子花は装飾的だけれど、よく見ると植物のリアリティは捉えられています。花卉の疵つきやすき、葉の先端の優しい鋭さ、大地にしっかりと食い込む根元、驚くべき実在感によって堅固に支えられています。

光琳の写生については、『小西家文書』中にある「鳥獸写生図巻」がその謎を解く鍵になります。そこに描かれるのは、幾種類もの鴨にはじまって、孔雀・インコなど当時珍しかった鳥や、駱駝・狸・鼯鼠まで、六十六種の禽鳥と三種の獣に及びます。光琳が生まれたころの京都では、珍鳥に対する関心が高まり、それらを数多く集め飼っていた公家もいました。また、時代が下りますが、十九世紀初頭の京都には、祇園に孔雀茶屋というのがあり、孔雀やインコなどの珍鳥を見世物にして名物になっていました。そういう所で珍鳥を見た可能性もあるし、光琳のまわりには本草学者もいましたから、絵の抜きんでた出来ばえを見るとき、光琳が実物を見て写生した可能性は、ほとんど確実だと思っていました。

ところが、辻惟雄先生が、あるとき大英博物館の倉庫中に、この光琳の「鳥獸写生図巻」と同じ絵を含む画帖を発見し、昭和五十四年（一九七九）に論文として発表しました。それは狩野探幽の写生帖の模写の模写でした。光琳の写生帖に載せる六十六種のうち、六分の一の十一種がまったく同じだったのです。そうすると光琳は探幽の写生帖の原本かその模写を写したことになります。

すが、そのような二次写生の場合にさえ、実在感が損なわれることはなかったのです。的確な羽毛の柔らかさ、風切り羽の鋭さなどは、とても二次写生のものとは思えません。「鳥獸写生図巻」のなかには、実際に見て描いたものもあるだろうと思うし、仮に全部が模写だとしても、この実在感付与の才能を根底で支えているものは、現実世界への強烈な関心であったに違いありません。

宗達にしても、養源院杉戸絵の「白象」を見てください。デザインとして素晴らしいのと同時に、あそこには象の一トンとか二トンとかの重量も表されていると言わざるを得ないでしょう。

■さまざまな個性を包括

——琳派を考えるとときに面白いのは、近代の日本画家は必ず琳派と実体性によく当てはまると思います。御舟はリアリズムのあとに琳派に復帰していて、近代の日本画を理解するには恰好の素材です。

春草や、横山大観、下村観山、それから御舟ですね。御舟は明らかに琳派を学んでいます。彼はリアリズム画家ですね。

近代から見るといえるのは、古田亮さんという研究者がやっている『俵屋宗達』（平凡社新書、二〇一〇年）を出しています。古田さんはもともと近代絵画史をやっている人で、近代絵画から見た宗達ですね。私たちは歴史を伝統からの連続として見るけれど、現代から照らし上げるのも確かによいやり方です。しかし、

古田さんが出した結論は「宗達は琳派ではない」というものです。

つまり近代の画家と非常に類縁性が強くて、宗達はひとりの近代の芸術家であるというのです。宗達は頭抜けた芸術家だから琳派ではないというのですが、琳派から宗達が抜けてしまったら困りますね。今回の私の本から宗達を全部抜かないといけません。

それと関連して、よく琳派を定義してくださいといわれます。琳派ってなんですかと。しかし定義できないのが琳派である、というのが私の定義です。定義できないのです。

——最後に、江戸琳派についてはどうでしょうか。

京都に來ると、江戸琳派は琳派ではないという先生がたくさんいらつしゃいます。あれは琳派の墮落であると。確かに美意識はずいぶん違っていて、能に対する歌舞伎、和歌に対する俳諧・川柳みたいに違う。しかし琳派とはそういうものです。さまざまな個性を包括しているのですよ。狩野派というのは代々統一感がひじょうに強くて、そのなかに個性があります。しかし琳派はむしろ個性の中に統一感があります。それらは私淑することによって生まれます。美意識がちよつと違うからといって琳派ではないというの、あまりに近視眼的な見方です。

私はよく虫瞰・鳥瞰というのですが、近寄って虫のように見ると違いがあるけれど、鳥のように高いところから抱一・光琳・宗達を見ると、日本の絵画史全体からすればよく似ています。響きあっているわけです。

（二〇一四年一月二六日 於…京都美術工芸大学）

二〇一五年はミラノ万博！じつは万博をきっかけに世の中に広がり、人びとが知らず知らず之恩恵を受けている万博の「遺産」を紹介します。(全4回)

万博がもたらしたもの(第一回)

メタボリズムとカプセル・ホテル

橋爪紳也

一九七〇年大阪万博を契機に、各種のアイデアやシステムが、社会全体にひろまった。居住機能のカプセル化も、そのひとつである。

千里丘陵で開催された博覧会場では、新しい工法や構造を採択したもの、前衛的なデザインのものなど、各種のパビリオンが建設された。そのなかで、必要に応じて居室を増殖させることができるユニット化されたパビリオンも注目された。

タカラビュートイリオンのように、鋼管フレームによる立体格子を積み上げていくことで構成されるものがあつた。いっぽうでエキスポタワーや住友童話館のように塔上にユニットを据え置くモデル、あるいは巨大なトラス構造の大屋根から展示室を吊る空中テーマ館などの事例もあつた。

いずれも黒川紀章氏や菊竹清訓氏たちが提唱していた「メタボリズム」の設計思想に基づくデザインである。「メタボリズム」とは、「新陳代謝」という意味合いである。工業生産された着脱可能なユニットを組み合わせることで、社会状況の変化、家族構

成の変容に応じて、有機的に成長する可変性の高い建築空間が提案された。

居室を工場で生産、現場に輸送のうえ組みあげる、いわゆる「プレハブ工法」は、当時、すでに日本でも普及をみていた。一九五九年に大和ハウスがミゼットハウスを販売して以降、積水ハウスやミサワホームなどが追随するかたちで、鉄鋼系や木質系の工業化住宅が販売されるようになっていた。

しかし万博会場で見受けられたメタボリズムのパビリオン群には、スケールアウトしたものが目につく。なかには「空中都市」のモデルを可視化するものもあつた。プレハブ工法による建築の工業化という発想を、都市の尺度に発展させたものとみなすことが可能だろう。

いっぽうで、プレハブ住宅やメタボリズムの建築とは質の異なるユニット化の試みもあつた。流行をみていた「スペースエイジ」のデザインの影響のもと、プラスチック系の素材を曲面や球形に成型し、居住に必要な一定の機能を取めようという試みだ。

サンヨー館に出展された「健康カプセル」や「ウルトラソニックバス」が、その好例だろう。特に後者は「人間洗濯機」の通称で知られるところとなった。カプセル内に座っているだけで、自動的に温水が注入される。水中で派生する超音波と激しく流動するマッサージュボールの効果で、身体が洗われると同時にマッサージュの効果もたらされるといったものだ。水着の女性による実演が話題となった。

カプセル状の極小空間に多様な機能を収め、全自動で作動させるといった発想にその本質がある。技術的には現在の介護用入浴装置のプロトタイプとなったと、のちに出版企業は説明している。

アポロの司令船や月着陸船の内部を連想させる「カプセル」状



ウルトラソニックバス
(三洋電気株式会社提供)

の機能的な空間ユニットの提案に、触発された人が少なからずいたようだ。大阪でサウナを経営していた中野幸雄氏もそのひとりであった。

中野氏は博覧会場での強烈な印象をもとに、ホテルのカプセル化を着想、黒川紀章氏に相談を持ち込む。結果、奥行き一九〇センチ、幅九〇センチ、高さ九〇センチという限られた空間に、寝具のほか、時計・ラジオ・テレビなど、人ひとりが宿泊するうえで必要最低限の機能を収納するユニットがデザインされた。要はビジネスホテルの室内にある諸機能を、最小限のサイズに切り詰めるようにしたわけだ。

発注を受けた家具メーカーのコトブキが製作したユニットは、「スリープカプセル」と命名された。工場ですべて成型することで、カプセル自体が十分な強度を持つ。そのため室内の状況に応じて、さまざまな組み合わせが可能となった。

この「スリープカプセル」を室内に積み上げて、宿泊者向きの居室とした「カプセルイン・大阪」が、大阪梅田に開業したのは一九七九年のことだ。世界初となる「カプセル・ホテル」である。以後、安価なビジネスホテルのモデルとして全国に普及する。現在では、海外から来日する観光客のあいだでも知られるようになった。万国博覧会で提示されたアイデアが、新たなビジネスモデルとなって継承された事例である。

(大阪府立大学21世紀科学研究機構教授)

伝統社会の識字・学び・リテラシー

日本の近世以前の伝統社会では人々の識字力はいかほどのものだったのだろうか。このような問いかけをすると、おそらく大半の方々は、手習塾や寺子屋の存在を思い浮かべながらも、武士層はともかく、一般の民衆層についてはその能力はさほどではないという反応が多いのではないだろうか。その一方で、この種の問題に関心のある方々の大半は、その程度はかなり高いのではないかと応じられるのではないだろうか。場合によっては、江戸時代もしくは幕末維新期においては、相当に水準が高く、国際的な比較をしても高い水準であり、世界で最も高い識字力を持っていたと捉えている方も少なくないかもしれない。このように、伝統社会に生きた人々の識字状況に関して対照的な見方が存在するようであるが、前近代の民衆層の識字状況について、関心や知識を持つている方々においては、総じてその識字力はかなり高めに捉えられる傾向にあると聞いていいであろう。

では、そうした捉え方の根拠としては、どのようなものが挙げられているのであろうか。言い換えればそうした判断に導いた文献では、何を根拠とされているのかということである。その代

表的な事例の一つとして、一九六九年に公刊されたハーバート・バッシンによる『日本近代化と教育』がある。ここでは石川謙・乙竹岩造などをはじめとする在来の日本教育史家の研究成果に拠りながら、近世における男子の識字率を四〇%から五〇%と、比較的高く捉えても不合理ではないとされているのだが、根拠は手習塾・寺子屋への通学状況である。ただバッシンは近代化論者として知られていたために、その主張はストレートには受け止められてこなかったといえる。

しかし、このような捉え方は八〇年代以降になると底流では引き継がれていたかのように、何人もの研究者によって幾重にも浮上してくる。それらのうち最も影響力のあったのは網野善彦といえるだろう。斬新な社会史的観点から新たな中世史像を提示しながら、矢継ぎ早に公刊された網野の著作のなかでも、多くの読者を得ていたのが一九九一年の『日本の歴史をよみなおす』である。同書のなかで、中世後期から近世にかけての識字状況についての言及がある。南北朝期を日本史の分水嶺とみていた網野は、この時期以降に識字状況についても大きな変化が現れ、徐々にそ

おお
と
やす
ひろ
大 戸 安 弘

の高揚が進み、近世後期には国際的な水準からみても特筆すべき高みに達したと強調している。ただしパッシンと同様に、民衆文書の残存など周辺状況からの論であり、識字状況の具体的な説明がなされているわけではないという制約があった。したがって、大づかみの指摘に留まっていたことは否めなかつた。

このようなことは以後の他の研究者によっても、微妙な相違を含みながらもおおむね引き継がれ、一般化されてきたといえるだろう。こうした日本の伝統社会における識字状況についての捉え方に潜む問題について、前近代を専門とする日本教育史研究者の間にあらためて検討してみようという気運が高まり、折々意見交換を重ねていたが、その後、二〇〇一年の夏に識字研究会を発足させ、組織的に共同研究に取り組むことになった。そこから試行錯誤しながら現在に至っているのであるが、これまでの研究蓄積の一区切りとして、今秋、『識字と学びの社会史——日本におけるリテラシーの諸相——』を思文閣出版より上梓した。

これまでの前近代、とりわけ近世における民衆層の識字状況を論じる際の論拠として注目されてきたのが、前述のとおり、手習塾・寺子屋の圧倒的ともいえる普及状況であったり、七〇〇〇種類を上回るとみられる往来物(民衆向けのテキスト)の残存状況、民衆層にまで深く浸透した読物の出版状況、膨大に残されている民衆文書、幕末維新期に來日した外国人による紀行文や日記などであった。ここには明治期以降の急速な近代教育の量的普及に成功した素因を、伝統社会における民衆教育の普及に求めようとす

る傾向の強い日本教育史分野の動向が投影されている可能性もあるだろう。ただ、このような周辺状況による論証だけでは、信頼性という点で制約があるという見方が、識字研究で先行していた西洋史分野にあることも、意識しないではいられなかつた。

こうした識字研究をめぐる難しさや隘路を切り開くために、当初、研究会のメンバーである木村政伸が着目していた花押・略押を手掛かりにして調査を試みた。その成果は、この度の論集のいくつかの章に現れているのだが、活動を重ねていくなかで、研究対象は拡大し、識字率を求めようとする量的な側面だけでなく、識字を核とする学びの内容や意味を問う質的側面についても考察を進めることになった。花押による自署率の推定や明治期の識字率調査に関する分析とともに、平安期貴族の識字状況、一向宗門徒やキリシタンの学習状況、近世在郷商人の教育意識など、リテラシーと学びの内容にまで範囲を拡げた構成となっている。

近年、リチャード・ルビンジャー『日本人のリテラシー 1600—1900年』の公刊、大黒俊二による「限界リテラシー」の紹介など、新たな視点からの研究動向もみられ、大いに刺激を受けている。なかなか困難な課題ではあるが、これからも一つ一つ個別具体的な状況を掘り起こし、日本の識字をめぐる諸状況の具体相に少しでも迫っていききたい。

(横浜国立大学教育人間科学部教授)

おんようじ 陰陽師が使う式神の実態をめぐる

やま
した
かつ
あき
山下克明

『今昔物語集』などにも登場し、陰陽師が使役する精霊という式神の実態についてはこれまで具体的な史料に乏しく、式盤の十二神将や三十六禽とか、陰陽師に従う童子をイメージしたものとか、さまざまにいわれてきた。ところが一〇世紀前半、洞底隱者（延暦寺東塔の僧葉恒）が北斗信仰に関連する仏典・天文書・五行書などの典籍を引用して著した『北斗護摩集』（東寺観智院蔵）に興味深い証言がある。その第十五には、『九曜秘曆』から、

羅睺これ翻りて月障をなす。この星天上にありては羅睺といひ、悪星なり。地にありては黄幡となすなり。羅睺は殺気ありて、天岡となす。計都はこれ翻りて彗星をなす。この星天上にありては計都といひ、悪星なり。地にありては豹尾となす。計都は殺気ありて、河魁となす云々。

と、つまり九曜の羅睺と計都は悪星で暦の八将神の黄幡・豹尾であり、ともに殺気があり、陰陽家十二神の天岡・河魁でもあるとの説を引き、葉恒自身は、

陰陽家の十二神中、河魁・天岡の二神を以て悪毒猛将の神となす。式を封じ厭鎮するとき、この二神を以て猛将となすなり。

と注している。これにより六壬式盤の十二月将（微明・河魁・従魁・伝送・小吉・勝先・太一・天剛・大衝・功曹・大吉・神后）が式神で、とくにその中の二月将河魁と八月将天岡（天剛とが「悪毒の猛将」だというのである。その用法についても「式を封じ厭鎮する」、すなわち式神を封じ込めまじない鎮めるという。では何を目的として河魁や天岡などの式神をまじない鎮められるのか。

まず、説話にみえる式神を使った陰陽師の呪詛が考えられる。例をあげると『宇治拾遺物語』巻二の八、「清明藏人少将を封ずる事」では、相智の雇う陰陽師に「式」をふせられた藏人少将を安倍晴明が夜通し身固めをして救い、かえって陰陽師は「しきふせて、既に式神かへりて、おのれ只今式にうて、死に侍りぬ」といって死んだという。清明の呪力と呪術師としての陰陽師の不気味さを示す話である。

政権を握った藤原道長は実際にしばしば呪詛をしかけられたが、『小記目録』第二十の長保二年（一〇〇〇）五月八日条には、「左府の所悩、式神の致す所と云々の事」と、道長の病が式神のなすところとされ、翌九日に邸内から「厭物」が発見されている。な

お、五月十一日には呪詛者の安正が拷訊され六月五日には獄死しているが、式神は厭物に封じ込められていたのであるうか。

寛弘六年（一〇〇九）二月の中西藤原彰子・敦成親王・左大臣道長呪詛事件は、藤原伊周の復権をもくろむ高階光子や源方理が法師陰陽師の円能に厭符を作らせ行つたものだが、『政事要略』卷七十所載、円能らの罪名勘文には訊問調書を引き、明法博士は円能に「厭式を作り、中宮、若宮並びに左大臣を呪咀し奉るの由、実に依り弁じ申せ」と訊問している。繁田信一氏はこれに注目して、陰陽師が作った呪符が「厭式」と呼ばれていることから、呪詛のために陰陽師が作った呪物が「式神」の実体であった可能性があると指摘するが（『陰陽師と貴族社会』吉川弘文館、二〇〇四年）、これも葉恒の、式神を封じ込めまじない鎮める用法と関わるものと理解できるだろう。円能はさらに「ほかにこの事を相知る陰陽師いくばく侍りし。また有験の寺社及びしかるべきの所々にこの厭法をなすか」と、弟子の妙延も「厭符等を埋め置く所々、弁じ申せ」と訊問されている。これらから呪詛は天岡・河魁等の式神を厭符に書してまじなう相手の家、あるいは験力のある寺社に埋め置くことにより達せられたことがうかがえる。

ここで気づいたことがある。平将門の乱の顛末を記し、一一世紀前半までには成立した『将門記』に、天慶二年（九三九）の末に将門がいよいよ「新皇」と称すと、朝廷では「百官は潔斎して、千たびの祈りを仁祠に請ふ。いはむやまた山々の阿闍梨は、邪滅悪滅の法を修す。社々の神祇官は、頓死頓滅の式を祭る」と、諸

社の祈禱や密教修法とともに式を祭り将門の急死を祈願したという。「日本思想大系」本の注では式——「式神、識神。陰陽師が使役する鬼神」とするが、陰陽師ではなく「社々の神祇官」とあるのを不審に思っていた。これも先の「有験の寺社」と解すと、将門呪詛のために朝廷が陰陽師に命じ神社で神職とともに式神による厭法を行つたとすれば腑に落ちる。

さらに『将門記』は続けて、「悪鬼の名号をば、大壇の中に焼き、賊人の形像をば、棘楓の下に着く」とある。修法の加持の煙火で将門の名号を焼くとともに、形像を棗・楓の下に着くとは、『唐六典』卷十四太卜署に「以楓木为天、棗心为地」と、両木を式盤の天盤地盤の材と記すように、将門の人形を式神の座す式盤の下に敷くということであり、これも呪詛行為だった。

朝廷が追討使の派遣のみならず将門調伏の祈禱を種々行つたことは当時の記録に明らかだが、陰陽寮にも兵乱鎮定の祭祀を諮問し、『貞信公記抄』天慶二年五月十六日条で陰陽権助文武兼に八省院で太一式祭（これも太一式盤と関わる祭祀であろう）を修させ、十二月三十日条には陰陽師の賀茂忠行を召し、「若し功あれば、殊に賞すべき事を仰す」とあり、『将門記』の式神と式盤を用いた呪法の記述は、俄然真実味を帯びてくるのである。

なお、『続古事談』卷二の源高明の左遷にまつわる話しから、式神を使う厭法は呪詛だけでなく、競馬などのさいにも邪気を鎮め、勝利を祈願するまじないとして行われていたであろうことも付記しておく。

（大東文化大学東洋研究所兼任研究員）

史料

探訪

58

百万塔と陀羅尼だらに

辻つじ本もと直なお彦ひこ
(紙の博物館 学芸部長)

百万塔は、紙の博物館創立当初から、館のシンボルとなっており、百万塔と陀羅尼の実物は、紙の博物館四階に常設展示されている。昭和三〇年に創刊した当館の機関誌は、現在一四八号を数えるが、その機関誌名は「百万塔」で、同年出来た博物館友の会の名称は「陀羅尼会」。現在の会員数は約一五〇名である。本稿の後半で、陀羅尼を内包した木製の百万塔が、陀羅尼を一二〇〇年以上上守ることができたその科学的理由をご説明したい。

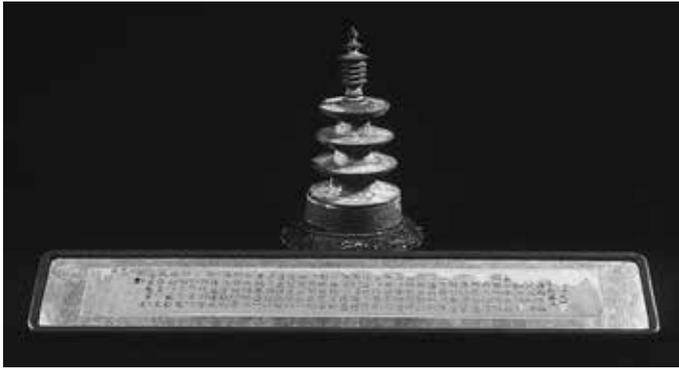
百万塔とは、藤原仲麻呂の乱を平定後の天平宝字八年(七六四)、国家安泰を願う称徳天皇の発願で、木製の三重の塔が百万基作られ、法隆寺・興福寺など十大寺に奉納されたもの。このことは、『続日本紀』宝龜元年(七七〇)に記されている。十大寺は諸説あるが『薬師寺縁起』によると、右記二寺以外に、奈良の大安寺・東大寺・元興寺・西大寺・薬師寺、摂津の四天王寺、近江の崇福寺、大和の弘福寺とある。

百万塔の内部に納められている陀羅尼は、一種の呪文で根本陀羅尼、相輪陀羅尼、自心印陀羅尼および六度陀羅尼の四種類があり、当館はそのうち根本陀羅尼と自心印陀羅尼を各一卷ずつ所蔵

している。なお、平子鐸嶺『百万小塔肆攷』(明治四二年)によると法隆寺に当時残存する陀羅尼の内訳は、根本三一巻、相輪四一〇巻、自心印九八〇巻、六度七巻、その他断片は二、三一五巻に及ぶ。また法隆寺に残存する百万塔小塔は四三、九三〇基で、そのうち完全なものは、三〇〇基のみであったという。このとき一〇〇基が旧国宝に指定され、現在は重要文化財として、その一部が大宝蔵殿において展示公開されている。

百万塔の陀羅尼が印刷物として、刊行年代が明らかで、世界最古の現存物であることもあって、その研究は数多く、最近では、『百万塔陀羅尼の研究——静嘉堂文庫所蔵本を中心に——』(増田晴美編著、平成一九年、汲古書院発行)など優れた報告がある。その参考文献目録によると、百万塔と陀羅尼に直接言及した文献数は江戸期で一〇件、明治以降は単行本として八五件、雑誌・紀要・定期刊行物で六八件あり、多くの人々が百万塔と陀羅尼に興味を持っていたことが分かる。

百万塔と陀羅尼の研究領域は、称徳天皇とその時代背景、『無垢淨光大陀羅尼經』の中の四種の呪文、印刷に関する様々な点、



百万塔と陀羅尼(紙の博物館蔵)

百万塔の製作、その組織および期間など多岐にわたる。印刷に關しては、木版説と銅版説の両説があり、結論ははまだ出ていない。用紙は、楮紙と麻紙の二種類とされている。法隆寺に残された百万塔には、三重小塔の他に、十万節塔と一万節塔が一基ずつ

ある。三重小塔は高さ一三・五センチだが、十万節塔は十三重で高さ約七〇センチ、一万節塔は七重で約四八センチで、それぞれ小塔が十万基、一万基という満数の時に作られたとされる。百万塔は塔身部と相輪部から出来ている。その塔身部の空洞に陀羅尼一卷が納められた。

塔内に経文を納める意味とその科学的理由を考えてみたい。話は少し飛ぶが、正倉院の紙が百万塔の陀羅尼と同様一二〇〇年以上保

たれた理由は、校倉造りの建物ではなく、木材の吸脱湿効果によると考えられる。実は正倉院内部に設置されていた総数一六六個に上る唐櫃内部の湿度が一定していたということがその理由である。すでにいくつかわかっている要因は、まずは、中性紙である和紙であったこと、「勅封」すなわち天皇の許可無くして開錠できなかつたこと、高床式校倉造りで通気性などが優れていたこと、曝涼で点検と修理を行っていたことがよく知られているが、実は決定的要因が、二〇〇三年「正倉の温湿度環境調査」で明らかにされた。それは唐櫃の内部湿度の安定性である。

平成一二年四月二十九日から六月九日までの正倉院内・外および唐櫃内の相対湿度変動を測定した結果、外気湿度は、一日に平均して約五〇%も変化しているのに対して、正倉内部の一日の湿度変化は、約六%、唐櫃内のそれは〇・八%であった。唐櫃内の一日の湿度変化は、正倉内部の十分の一にとどまり、外気と比較すると百分の一となっている。どうして、唐櫃内部はわずかな湿度変化に押さえ込むことができたのか。それは、唐櫃を構成している厚さ約二センチのスギ材すなわち木材の吸脱湿作用による。木材には、温度が上がりその結果湿度が下がると放湿し、逆に温度が下がり湿度が高くなると吸湿する作用があるからである。なお、唐櫃ではなく、麻袋に収蔵されていた屏風一〇六帖六三二扇のうち、現在残っているのは四〇扇のみとのことで、唐櫃の効果は、このことからもうかがい知ることができる。

なお、この裏付けとなる研究結果を、外国での報告に見出す

ことができる。それは、室温一定の条件下、湿度のみの変化で、紙の強度が低下していくというものである。二〇〇二年、カーネギーメロン大学のジョン・ボガードとポール・ウィットモアが、文化財保存国際研究所《The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works》のボルチモア会議で発表した「湿度変動が紙の劣化に与える影響に関する研究」である。不純物の無いセルロース濾紙を、温度（室温）一定の条件下に、相対湿度二五％と七五％で二時間ずつ交互に経験させ、その強度変化を測定する方法である。湿度変動を千回繰り返すと、紙の強度が半分以下に低下し、紙を構成している繊維の強度も同様に低下した。なぜ、湿度変化だけで紙の強度が低下するのか。その答えは繊維のセルロース分子が切断されているという結果であった。湿度変化は無くても、湿度変化が繰り返されるだけで、セルロース分子が切断され、繊維強度が低下することを示したのである（詳しくは、『百万塔』第一二六号（二〇一〇年）、七七頁の拙論を参照）。以上から、紙を保存する上で、湿度変化がいかに大きく影響するかが明らかになった。

陀羅尼は木製の百万塔の塔内に納められている。檜材の塔身自体が湿度調整をして、一二〇〇年間、陀羅尼を守り抜いたのである。陀羅尼が百万塔のくりぬかれた塔身部に納められ、相輪部で蓋をされていたのは、科学的な理由もあつたのである。

— MEMO —

公益財団法人 紙の博物館

〒114 0002 東京都北区王子1-1-13（飛鳥山公園内）

TEL 03-3916-2320 FAX 03-5907-7511

ホームページ <http://www.papermuseum.jp>

・開館時間 午前10時～午後5時（ただし入館は午後4時半まで）
・休館日 月曜（祝日の場合は開館）、祝日直後の平日、
年末年始（12月28日、1月4日）

・入館料 大人 個人300円 団体（20名以上）240円
小中高生 個人100円 団体80円

紙の博物館は和紙、洋紙を問わず古今東西の紙に関する資料を幅広く収集し、保存・展示する、世界有数の紙専門の博物館です。一九五〇年にわが国の洋紙発祥の地である東京・王子に開設されました。一九九七年に飛鳥山公園内に移転し、翌九八年に現在の新館がオープンしました。二〇〇九年には、博物館・美術館関係では全国初となる公益財団法人の認定を受けました。今日では、多くの紙関係会社の支援によって運営されています（今年六月現在一四一社）。

常設展示では、紙の製造工程、種類や用途、紙の歴史、紙の工芸品、歴史的資料や生活用品などを展示しています。また、紙に関する書籍、約一万五千点を有し、図書室で一般公開しています。



開催中の企画展
「紙で旅するニッポン」
～関東・甲信編～

会期 来年三月一日まで

関東・甲信地域の製紙業の歴史や特色を、様々な資料で紹介。

書評・紹介一覧 10～11月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事 [敬称略]	
岩倉具視関係史料	憲政常道と政党政治	(紹)『日本史研究』627号(母利美和)	(紹)『藝林』第63巻2号(菅谷幸浩)
牛と農村の近代史	元伯宗旦の研究	(評)『日本史研究』627号(大島真理夫)	(紹)『淡交』12月号
栄花物語・大鏡の研究	講座日本茶の湯全史	(評)『日本歴史』797号(福長進)	(紹)『石州』654号
近江の古像	(紹)『婦人公論』10/22	(紹)「中外日報」11/7	住友の歴史
茶の湯 恩籟抄	(紹)「愛媛新聞」11/9	(紹)『なごみ』11月号	大航海時代の日本と金属交易
外国人のみたお伽ばなし	(紹)「西日本新聞」11/2	(紹)『男の隠れ家』12月号	大徳寺伝来五百羅漢図
京都雑色記録	(紹)「佛教タイムス」10/23	(紹)「解放新聞」10/20	月を愛でる
近代京都の施薬院	(紹)『月刊美術』No.471	(紹)『科学史研究』No. 271(木下知威)	日本古代の武器
近代古墳保存行政の研究	(紹)「読売新聞」10/25夕刊	(紹)『考古学ジャーナル』10月号(山岸良二)	法然上人絵伝の研究
近代日本の歴史都市	(評)『日本歴史』797号(祢津宗伸)	(紹)『地方史研究』371号(松本洋幸)	室町幕府管領施行システムの研究
	(評)『日本歴史』798号(岩元修一)		

10月から11月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
月を愛でる	逸翁美術館編	1778-6 C1071	1,000	10
日本中世の地域社会と仏教	湯之上隆著	1773-1 C3021	8,000	10
識字と学びの社会史	大戸安弘・八鍬友広編	1772-4 C3037	7,000	10
緒方郁蔵伝	古西義磨著	1774-8 C1021	2,500	10
中世寺院社会と民衆	下坂守著	1779-3 C3021	7,500	11
平家物語生成考	浜畑圭吾著	1769-4 C3093	7,000	11

10月から11月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
別府大学文化財研究所企画シリーズ	3	3	大航海時代の日本と金属交易	1768-7 C3021	3,500	10
別府大学文化財研究所企画シリーズ	2	2	キリシタン大名の考古学 (2刷)	1472-3 C3021	3,800	11
新高裏を語る	14	10	志を継ぐ	1782-3 C1016	1,900	10

(表示価格は税別)

▼ひよんなことから、フジテレビ月曜日9時の連続ドラマ、いわゆる「月9」の「信長協奏曲」にはまっています。「月9」で歴史ドラマなので、期待はほとんどしていませんでしたが、第一回目からほろりとさせられる部分があり、奇抜な設定もうまい具合につつまを合わせていく展開に構成のうまさを感じました。原作は連載中の漫画ですが、このような漫画やドラマ・アニメ・ゲームなどをきっかけに学問の世界に入ってこれられる方が増え、学問の世界の活性化につながれば良いかと日々妄想しております。(I)

☆フェア情報

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

- ・ T E N D O 八文字屋 (山形県天童市)
- ・ 紀伊國屋書店新潟店 (新潟県新潟市)
- ・ 今井書店グループセンター店 (高根県松江市)
- ・ 芳林堂書店高田馬場店 (東京都新宿区)
- ・ ジュンク堂書店三宮駅前店 (兵庫県神戸市)
- ・ 喜久屋書店阿倍野店 (大阪市阿倍野区)
- ・ ジュンク堂書店上本町店 (大阪市天王寺区)
- ・ 今井書店出雲店 (鳥根県出雲市)

▼今回のていーたいむは、美術史家・川崎博先生に聞き手をお願いし、濃密でしかもわかり易い、贅沢な琳派講座となっています。河野元昭先生の著書『琳派―響きあう美』も学術書ながら啓蒙書としても読み易い内容です！(Q)

▼万博は未来を映す鏡。来年のミラノ博はどんな未来を映すのか？万博といえは万博競技場を本拠とするガンバ大阪が完全復活！関西サッカーファンとしてはうれしい限りです。(M)

▼11月に、日本の和紙がユネスコ無形遺産に登録された。和紙独特の風合いは、一度触れたら忘れられない。本の手触りも、同様によいもの。来年もご晶願ください。(大)

▼冬は寺社がより神聖に感じられます。雪が積もればなおよし。いつもの景色が真っ白に変わる瞬間は大人になった今でも心躍ります。(m)

▼年々、冬が好きになっていきます。たくさん着込めば、寒風もまた楽し。冷たい中、逆境の中でこそ感じる生の暖かみがあります。(h)

▼書店店頭用書籍の入替が遅れております。弊社書籍を並べる書店様が増えましたが、入替が追いつきません。申し訳ございません。(江)

▼表紙図版・加彩 婦女俑(8世紀)大阪市立東洋陶磁美術館／『中国南北朝隋唐陶俑の研究』より)

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(4・7・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.96

2014(平成26)年12月24日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷲草デザイン事務所

中国南北朝隋唐 陶俑の研究

小林仁著

〔2月刊行予定〕

始皇帝の「兵馬俑」で知られる俑は、死者とともに埋葬される副葬品で、中国の南北朝から隋唐時代は質量ともにその黄金期である。近年各地の葬墓から続々と出土例が報告され、とくに考古学的手法による研究の蓄積が著しい。これに対し本書は、豊富な実物調査に基づいて、膨大な数の資料を造形的特質、様式の変遷、地域性などによって整理し、美術史・陶磁史的視点からさまざまな論点を提示。分裂から統一へとダイナミックに転換する時代のなかで生じた変化と連続性を跡づけ、新たな陶俑研究の確立を目指す。収録図版多数。

内 容

- 第一部 南北朝時代の陶俑の様式変遷と地域性**
- 第1章 洛陽北魏陶俑の成立とその展開
 - 第2章 北朝鎮墓獸の誕生と展開
 - 第3章 南北朝時代における南北境界地域の陶俑について
 - 第4章 南朝陶俑の諸相
 - 第5章 北齊時代の俑に見る二大様式の成立とその意義
 - 第6章 北齊鄴地区の明器生産とその系譜
- 第二部 隋唐時代の陶俑への新たな視座**
- 第7章 隋俑考
 - 第8章 白瓷の誕生
 - 第9章 初唐黄釉加彩俑の特質と意義
 - 第10章 唐代邢窯における俑の生産とその流通に関する諸問題
 - 第11章 西安・唐代醴泉坊窯址の発掘成果とその意義
 - 第12章 唐時代の俑の制作技法について

▼B5判・カラー口絵八頁＋四五〇頁／本体一三、〇〇〇円

こばやし・ひとし：一九六八年東京都生。大阪市立東洋陶磁美術館主任学芸員。

日本古代の武器 『国家珍宝帳』と正倉院の器仗

近藤好和著

〔10月刊行〕

『国家珍宝帳』と正倉院の器仗(武器)をそれぞれ詳細に解説し、図版編には正倉院器仗を中心に多数の写真を取録。貴重な基本文献・伝世品である両者を相関的に取り扱い、日本古代の器仗を理解するための基本図書をめざす。



内 容

- 序 章 本書の視点**
- 第一章 『珍宝帳』記載器仗の概要／正倉院器仗の概要／『珍宝帳』記載器仗の出處**
- 第二章 大刀**
〔御大刀壹佰口〕／正倉院の大刀
- 第三章 小刀・刀子・鉞・手鉞**
〔珍宝帳〕記載の小刀・刀子／正倉院の刀子・合鞘／正倉院の鉞・手鉞
- 第四章 弓・鞆**
〔御弓壹佰張〕／正倉院の弓／正倉院の鞆
- 第五章 鞞・胡禄・箭**
鞞・胡禄・箭の概要／〔御箭壹佰具〕／正倉院の胡禄と胡禄取納箭／正倉院の胡禄未取納箭
- 第六章 甲**
古代の甲／〔御甲壹佰領〕／正倉院の甲
- 終 章**
- 図版編／図版出典一覧

▼A5判・四七〇頁／本体八、五〇〇円

こんどう・よしかず：一九五七年神奈川県生。一九八七年國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。博士(文学・広島大学)

平安時代陰陽道史研究

山下克明著

▼ A5判・四五〇頁／本体八、五〇〇円

陰陽道の日本の特質とはなにか？その成立・展開期である平安時代を中心に、仏教・神祇信仰と並ぶ宗教としての陰陽道のあり方、陰陽師たちの天文観測技術や呪術・祭祀など活動の実態とその浸透、彼らの信仰などをさまざまな角度から明らかにする。また、中国から伝来し陰陽道の背景となった諸典籍、その展開のなかで陰陽師たちが著し伝えた主な関連史料を、解説を付しながら幅広く紹介。陰陽師が残した日記である『承久三年具注暦』の翻刻を収める。

【1月刊行予定】

内容

- 序章 陰陽道の特質と関係典籍
- 第一部 陰陽道の成立とその展開
- 第一章 陰陽道の成立と儒教的理念の衰退
- 第二章 陰陽道の宗教的特質
- 第三章 陰陽道信仰の諸相―中世初期の貴族官人・都市民・陰陽師―
- 第四章 密教修法と陰陽道
- 第五章 院政期の大将軍信仰と大将軍堂
- 第二部 安倍晴明と天文家安倍氏
- 第二章 安倍晴明の「土御門の家」と晴明伝承
- 第三章 天文道と天文家安倍氏
- 第三部 陰陽道と文献史料
- 第一章 陰陽道関連史料の伝存状況
- 第二章 『承久三年具注暦』の考察
- 第三章 『大唐陰陽書』の考察―日本の伝本を中心として―
- 第四章 宣明暦について―高麗史』暦志と日本の伝本―
- 付論 平安時代初期の政治課題と漢籍―三伝・三史』劉子』の利用―
- やました・かつあき：一九五二年、千葉県生。青山学院大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。博士（歴史学）。現在、大東文化大学東洋研究所兼任研究員。

平家物語生成考

浜畑圭吾著

▼ A5判・三三〇頁／本体七、〇〇〇円

平家物語は、単なる本文異同にとどまらず、享受と改変が繰り返され、様々なヴァリエーションを生み出していった物語である。治承寿永の源平争乱という「歴史」を題材に、様々な「物語」―諸本を生成してきた編者たちの思惑とは、何であったのか。平家物語諸本の比較を通して独自の表現や記事、改変された部分をあぶり出してその基盤を追究し、物語生成の動機や場、背景をつぶさに考察。

はじめに 本書の問題意識／本書の構成

第1編 延慶本平家物語と『宝物集』燈台鬼説話の位置

第2編 長門本平家物語の展開基盤

三針投擲説話の展開

第3編 南都異本平家物語と熊野三山

―『維盛熊野参詣物語』をめぐる―

第4編 『源平盛衰記』と地藏信仰

西光廻地藏安置説話の生成

西光と五条坊門の地藏―西光地藏安置伝承の系譜―

忠快赦免説話の展開

「彌羅尼物語」の展開

「重衡長光寺参詣物語」の生成

第5編 「共通祖本」の生成基盤

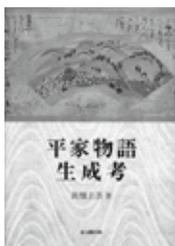
「旧延慶本」における阿育王伝承

「田南都異本」と「高野物語」の関係

おわりに 平家物語の「唱導性」―敗者救済の眼差し―

【12月刊行】

はまはた・けいこ：一九七八年生。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得。博士（文学）。現在、高野山大学文学部助教。



蘭溪和尚語録

佐藤秀孝・館隆志編

鎌倉中期の渡来僧・蘭溪道隆（一二二三年～一二七八年）は、鎌倉禪宗の基礎を築いた高僧で、大覚派の祖・建長寺の開山。その語録の原文影印と翻刻に、訓註・補注・解題を付して全貌を明かす。

建長寺所蔵の覆本五山版『蘭溪和尚語録』を底本に、影印とその翻刻を載せ、これに『大覚禪師語録』（文政本・大正蔵本）の当該箇所より文字の対校をなす。また、原文の書き下し、その下段に語釈を註し、出典や説明等が必要な項目に関しては補注を別に載せ、解題を付す。

〔12月刊行〕

▼B5判・六六二頁／本体一五、〇〇〇円

室町水墨画と五山文学

城市真理子著

室町時代の詩画軸における詩と絵画の関係、禪林での詩画軸の制作行程、禪僧の文人意識の絵画への反映を論じ、詩文僧による〈詩画軸制作システム〉を説明していく。

▼A5判・三三六頁／本体六、〇〇〇円

五山禪林宗派図

玉村竹二著

禪宗史研究の第一人者が、永年の研究成果を基に五山禪林の宗派図を体系的にまとめた画期的な一書。

▼B5判・四二〇頁／本体一五、〇〇〇円

関山慧玄と初期妙心寺

加藤正俊著

妙心寺の開山・関山慧玄は、自らの意志で伝記の手掛かりとなるものは遺さなかった。後世の関山伝や印可状等の諸史料を精密に分析し、初期妙心寺における関山を中心とした諸問題にとりくみ、宗門の密室性に分け入った一書。

▼A5判・三九〇頁／本体六、五〇〇円

蘭溪道隆禪師全集 I



園城寺の仏像 第一巻 智証大師篇

園城寺監修／園城寺の仏像編纂委員会編

園城寺及び緑の寺に所蔵される仏像を網羅的に収録するシリーズ全四巻の第一巻。

本巻に、園城寺の秘仏（御骨大師・中尊大師）を含む智証大師像三軀と、京都、香川四寺に蔵する大師像について多数のカラー図版を掲載。詳細な調査・解説を付す。天台寺門宗教文化資料集成の一冊。



国宝 木造智証大師座像（中尊大師）

内容
序（天台寺門宗管長・福家英明）

◆図版◆

国宝 木造智証大師座像（御骨大師）

国宝 木造智証大師座像（中尊大師）

重要文化財 木造智証大師座像

重要文化財 木造智証大師座像

重要文化財 木造智証大師座像

木造智証大師座像

香川県指定文化財 木造智証大師座像

◆調査・解説◆

園城寺の二軀の智証大師像について（寺島典人）

第一巻 平安時代一

（九～十一世紀）

平成二十七年春

第二巻 平安時代二

（十二世紀）

平成二十七年秋

第三巻 平安時代三

（十三世紀）

平成二十八年春

第四巻 鎌倉～江戸時代

平成二十八年春

〔1月刊行予定〕

▼A4判・一四〇頁／本体二一、〇〇〇円

中世アーカイブズ学序説

御判御教書と朱印状・公帖

上島有著

【2月刊行予定】

▼B5判・四〇〇頁／本体一三、〇〇〇円

本書を単なる文献資料としてのみ扱うのではなく、「もの」としてとらえ、その総体を研究の対象とし続けてきた著者による「アーカイブズ学序説」。
文書を「かたち」「かたまり」「かさなり」の総体として、静態だけではなく動態として、さらに古代から近現代までを一貫した観点でとらえる理論的枠組みを提唱し、中世・近世にまたがる個別文書群について論究する。

〔内 容〕

序章 アーカイブズ学としての中世古文書学への道
— 東寺百合文書からアーカイブズ学へ —

第一章 妙蓮寺の近世文書について

第二章 近世の武家書札と公帖—南禅寺公帖の形態論的研究—

第三章 近世の領知判物・朱印状と公帖
— 室町時代の御判御教書との関連で —

第四章 天龍寺の朱印状と公帖
— 中世古文書学と近世古文書学の継承性に関する試論 —

補論Ⅰ 殿下と將軍—奉書と檀紙、折紙と豎紙—

補論Ⅱ 徳川將軍領知判物・朱印状の原点
— 藤井讓二「徳川將軍領知朱印状の古文書学的位置」 —

との関連で

補論Ⅲ 古文書学からアーカイブズ学への寸摘
— 史料論・室町幕府文書論 —

うえじま・たもつ：一九二四年三重県生。大阪電気通信大学教授、摂南大学教授、花園大学教授を歴任。摂南大学名誉教授。

東寺百合文書を読む

【1月増刷予定】

よみがえる日本の中世
上島有・大山喬平・黒川直則編

※東寺百合文書から50点を選び、釈文と第一線の研究者による解説を付す。
※各文書を大型写真で掲載し、中世文書を読み解くための格好の入門書。
※索引・文書編年目録・参考図版を付す。

〔内 容〕

東寺—文書の管理／東寺の沿革／東寺の境内と門前
武家—南北朝の武将／室町時代の武将／戦国期の武将
民衆—各地さまざま／庄園の顔／都に近く—久世上下、女御田など／日本海

に近く—若狭太良庄／丹波山地の奥—丹波大山庄／瀬戸内海に近く—
播磨矢野庄／中国山地の奥—備中新見庄

▼B5判変・一六〇頁／本体二、五〇〇円

東大寺文書を読む

堀池春峰監修／綾村宏・永村眞・湯山賢一編

古代を今に伝える東大寺文書（平成10年国宝指定）より50余点を選びその魅力を紹介。各文書には第一線の研究者による解説と釈文を付す。文書写真は大型図版で掲載、カラー口絵4点を付す。

〔内容〕1 文書の伝来／2 勧進と壇越／3 寺家と寺領／4 法会と教学／
5 文書の姿／編年文書目録 東大寺境内図

▼B5判変・一九二頁／本体二、八〇〇円

東寺百合文書

京都府立総合資料館編

既刊十一巻 ▼A5判・平均四四〇頁／各本体九、五〇〇円

最新刊 第十一巻 子函三 ▼A5判・四五八頁／本体九、五〇〇円

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（平成9年国宝に指定）。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

中世寺院社会と民衆

下坂守著

〔11月刊行〕

衆徒と馬借・神人・河原者

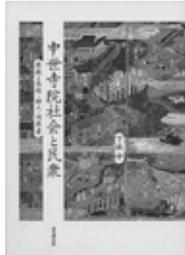
中世において比叡山延暦寺が果たした歴史的役割を、同寺の活動実態とその支配下にあった京・近江の民衆との関係を中心に考察する。

山門の歌詠の検討から、山門の「惣寺」がどのような組織と機能をもつものであったかを明らかにしたうえで、足利義満以降の武家政権との関係や、近江坂本の在地人と日吉社の大津神人が山門の活動にとのどのような影響を与えたかを論じ、さらには、中世都市京の変容についても、絵画史料を駆使して明らかにする。

『王法仏法相依論』に貫かれた中世寺院社会の具体像に光を当てて一書。

内容

- 第一篇 衆徒と閉籠
 - 中世延暦寺の大衆と「閉籠」／「山詠」の実相とその歴史的意義／中世寺院社会における身分／中世における「智証大師関係文書典籍」の伝来
- 第二篇 坂本の馬借
 - 中世・坂本の都市構造／堅田大責と坂本の馬借／坂本の馬借と土一揆
- 第三篇 山門と日吉社
 - 大津神人と日吉祭／大津神人と山門衆徒
- 第四篇 衆徒の金融と神人の金融
 - 応仁の乱と京都／中世京都・東山の風景
- ／中世「四条河原」考
- 付篇・史料紹介



『言継卿記』に見える法住寺〔付論〕
 ▼A5判・四三二頁／本体七、五〇〇円

しもさか・まるとは……一九四八年生。大谷大学大学院文学研究科修士課程修了。日本中世専攻。博士（文学）立命館大学。大津市史編纂室、京都国立博物館、文化庁美術学芸課、帝塚山大学人文学科、奈良大学史学科において勤務。京都国立博物館名誉館員。

日本中世の

地域社会と仏教

湯之上隆著

▼A5判・三八四頁／本体八、〇〇〇円

写経や法会、開帳事業、偽文書など様々な事象を通して、個人や集団の宗教行為がいかなる社会性を持ったのか、中世の地域社会における、仏教と社会との関係性を明らかにする。
 静岡県を中心とした地域社会の寺社文書の詳細紹介、紀行文から見る地域社会など、「宗教」と「地域社会」をキーワードとして古代から近代までの社会を概観する論集。

内容

- 第一篇 地域社会と經典
 - 第1章 平安時代の写経と法会
 - 第2章 鎌倉期駿河府中の宗教世界
 - 第3章 遠江国洞泉寺所蔵五部大乘経の成立と伝来
 - 第4章 美濃国薬王寺所蔵大般若経の開板と伝来
- 第二篇 地域社会と寺社
 - 第5章 覚海円成と伊豆国円成寺
 - 第6章 中世仏教と地方社会
 - 第7章 遠江山名郡木原権現由来記の歴史的環境
 - 第8章 中世後期の秋葉山と徳川家康
- 第三篇 地域社会の記憶
 - 第9章 遠江久野氏の成立とその歴史的環境
 - 第10章 旅日記・紀行文と地方社会
 - 第11章 名物瀬戸の染版をめぐる文化史
 - 第12章 近世後期神社祭祀をめぐる争論と偽文書

余篇
 小杉樞那の幕末・維新

ゆのうえ・たかし：一九四九年鹿児島市生。九州大学大学院文学研究科史学専攻博士課程中途退学。博士（文学）。現在、静岡大学教授。

天下人の 神格化と天皇

野村玄著

〔1月刊行予定〕

近世の政治史を考える上で重要な問題の一つは、秀吉から家康に至るまでの間、彼らによる天皇の位置づけが変化していく中、今度はその天下人自身までもが神格化を遂げていたことであった。豊臣秀吉や徳川家康の神格化が、なぜ近世前期の政治過程において要請され、それらはどのように実現したのかを解明し、そこでの天皇・朝廷の行動と意味を再検討するとともに、その後の徳川将軍家が天下人の神格や天皇・朝廷といかに向き合ったのかを、網吉期までを視野に入れ叙述する。

序論

幕藩制国家論のその後と日本中近世国家論／「徳川国家」論の限界／権門体制論と近世の天皇・朝廷／「政治史」の発展的継承と本書の課題／王権論に対する本書の立場

内容

- 第一部 豊臣秀吉・徳川家康の神格化と天皇
- 第二章 慶長期初頭の政治情勢と豊国大明神
- 第二章 徳川家光の国家構想と日光東照宮
- 第二章 身分集団としての禁中・公家中と江戸幕府
- 第二章 近世の堂上公家と身分制
- 第三章 徳川将軍家の国家構想の継承と限界
- 第三章 領主としての公家と家綱政権
- 第一章 天和・貞享期の綱吉政権と皇位
- 第二章 元禄・宝永期の徳川綱吉と「かけまくもかしこき日のもと」の国
- 補論 書評 田中暁龍著『近世前期朝幕関係の研究』
- 書評と紹介 藤田寛著『近世天皇論 近世天皇研究の意義と課題』

▼A5判・三八〇頁／本体七、〇〇〇円

のむら・げん：一九七六年大阪府生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。現在 防衛大学校人文社会科学学群人間文化学科学科准教授。

大航海時代の 日本と金属交易

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

分析科学と文献史学の融合を目指すシリーズ第三弾。最新の鉛同位体比分析の成果から、日本の銅生産や中世・近世日本の金属流通のありよう、南蛮貿易の意義などに新たな視角を提示する。巻末に戦国時代関連資料の鉛同位体比一覧を掲載。

日本中世に使用された中国銭の謎に挑む

コラム① 唯、錫、史観

15・16世紀海洋アジアの海域交流

コラム② 琉球王国のガラスはどこで生産されたのか？

鉛玉が語る日本の戦国時代における東南アジア交易

コラム③ 16世紀後半のアユタヤ交易と日本

コラム④ タイソン・鉛鉱山

鉛の流通と宣教師

コラム⑤ サンチャゴの鐘

コラム⑥ コンテナ陶磁のついで

金銀山開発をめぐる鉛需要について

江戸時代初期に佐渡金銀山で利用された鉛の産地（魯禰玖・平尾良光）

大砲伝来

コラム⑦ マニラ沖に沈んだスペイン船サン・デイエゴ号が語るもの

資料 戦国時代関連資料の鉛同位体比一覧

（西田京平・平尾良光）

（飯沼賢司）

（黒田明伸）

（村井章介）

（後藤晃一）

（平尾良光）

（川口洋平）

（仲野義文）

（上野淳也）

内容

- （飯沼賢司）
- （黒田明伸）
- （村井章介）
- （後藤晃一）
- （平尾良光）
- （川口洋平）
- （仲野義文）
- （上野淳也）
- （田中良和）
- （西田京平）
- （平尾良光）

〔10月刊行〕

▼B5判・二二四頁／本体三、五〇〇円

別府大学文化財研究所企画シリーズ「ヒトとモノと環境が語る」③

熊沢蕃山の思想冒険

山田芳則著

〔1月刊行予定〕

近世の儒者・熊沢蕃山（一六一九〜九一）の一つ一つの著作の思想構造の解明をめざし、さらにそれぞれの著作を比較することとで、蕃山の思想の変化に注目し、その変化の意味を問う。また中江藤樹『翁問答』や池田光政の藩政改革をとりあげて、岡山藩における蕃山の政治体験の意味を解明し、それらの考察から多様な蕃山の思想を立体的に浮かび上がらせる。

序論 蕃山思想の研究と方法

第一部 蕃山思想の前提

第一章 中江藤樹の『翁問答』の思想

第二章 池田光政の藩政改革

第二部 蕃山思想の形成

第一章 思想形成と『源語外伝』の思想

第二章 『集義和書』初版の思想

第三章 『集義和書』二版の思想

第三部 蕃山思想の展開（一）

第一章 『集義外書』の思想

第二章 『中庸小解』と『論語小解』の思想

第四部 蕃山思想の展開（二）

第一章 『女子訓』の思想

第二章 『三輪物語』と『大学或問』の思想

第五部 蕃山思想の展開（三）

第一章 『孝経小解』と『孝経外伝或問』の思想

第二章 『大学小解』・『夜会記』・『繫辞伝』・『易経小解』の思想

結論

▼ A5判・二一八頁／本体五、〇〇〇円

やまだ・よしのり：一九五二年新潟県生。同志社大学大学院文学研究科博士課程（後期）単位取得。博士（文化史学）。現在、就美大学教授。

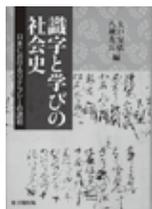
識字と学びの社会史

日本におけるリテラシーの諸相

〔10月刊行〕

大戸安弘・八鍬友広編

近世日本の識字率は、世界的に高い水準であったというところが、研究者の間でも、ある種の定説のように受けとめられているようである。しかし、本当にそうなのだろうか。本書では、近代学校制度が導入される以前までの、日本の識字と学びの歴史的展開とその諸相を、様々な史料から多面的に掘り起こし、実証的な検討を試みる。地域性と個別性を意識した事例の検証が必ずしも十分とはいえない現状に一石を投じる、教育史研究者七名による鋭敏の論文集。



序論

前近代日本における識字率推定をめぐる方法論的検討

大戸安弘・八鍬友広

「二文不通」の平安貴族

鈴木理恵（広島大学大学院教育学部教授）

木村政伸（新潟大学教育学部教授）

一向一揆を支えたもの

大戸安弘

キリシタンの信仰を支えた文字文化と口頭伝承

木村政伸

近世農民の自署花押と識字に関する一考察

梅村佳代（奈良教育大学名誉教授）

越前・若狭地域における近世初期の識字状況

八鍬友広

「継声館日記」にみる郷土「継声館」の教育

大田素子（和光大学現代人間学部教授）

武蔵国増上寺領王禅寺村における識字状況

大戸安弘

明治初年の識字状況

川村 肇（獨協大学国際教養学部教授）

▼ A5判・三七二頁／本体七、〇〇〇円

おおと・やすひろ：横浜国立大学教育人間科学部教授
やぐわ・ともひろ：東北大学大学院教育学部教授

幕末・維新の西洋兵学と

近代軍制

大村益次郎とその継承者

竹本知行著

幕末・維新の動きの中で、先人たちは国際環境に自らをどのように位置づけ、どのように西洋から兵学を受容し軍制を確立していったのか。日本という近代国家形成と国民形成の推進に大きな役割を果たした軍隊の創設の軌跡を、大村益次郎とその遺志をついだ山田顕義らの動向にたどり、その政治上上の特性を探る。



大村益次郎

〔12月刊行〕

▼A5判・三四〇頁／
本体六、三〇〇円

- 〔内容〕
- 第一章 幕末期における洋式兵学の位相
 - 第二章 大村益次郎における西洋兵学の受容
 - 第三章 大村益次郎における西洋兵学の実践
 - ―幕末―
 - 第四章 大村益次郎における西洋兵学の実践
 - ―明治―
 - 第五章 大村益次郎の遺訓
 - 第六章 大島貞薫と大坂兵学寮の創業
 - ―遺訓の実現―陸軍の仏式統一と
 - ―徴兵規則―の制定―
 - 第七章 廃藩置県と徴兵制度の確立―「徴兵規則」と「徴兵令」の関係性―
 - 第八章 「徴兵令」と山田顕義
- 終章
- 関連年表／索引

竹本知行 (たけもと・ともゆき)

1972年山口県生。

1996年同志社大学経済学部卒業。2005年同志社大学大学院法学研究科政治学専攻博士後期課程退学。2008年同志社大学博士(政治学)。

同志社大学法学部助教。

ふださししょうもん 札差証文(一)

住友史料叢書29

朝尾直弘監修／住友史料館編

〔1月刊行予定〕

◎住友家の貴重史料を活性化するためのシリーズ最新刊。

◎札差証文は一橋大学図書館所蔵の青地家旧蔵史料(札差伊勢屋幾次郎)と住友家文書(札差泉屋甚左衛門・同茂右衛門・同平右衛門)にのみ残り、旗本研究にも益をなす貴重な近世史料。

◎本書では蔵米取替臣団と札差(泉屋甚左衛門店ほか)の一紙文書を集め、人名索引と幕臣の印鑑影印を巻末に収録。

◎全二巻のうち第二巻は叢書の32回配本として、二〇一八年一月刊行予定。

▼A5判・二九二頁／本体七、五〇〇円

住友史料叢書

既刊28冊

小葉田淳・朝尾直弘監修／住友史料館編

世界銅産市場においても重要な位置を占めた住友家。本書はその一万数千点にのぼる近世史料のうち、重要で継続する記録類を中心に活字化。

▼A5判・平均四〇〇頁／既刊揃本体二五九、〇〇〇円

住友の歴史

全2巻

朝尾直弘監修／住友史料館編

近世初頭から銅の精錬を業とし、その後金融・貿易などを手がけ、近代の財閥につながる豪商の典型である住友の歴史をわかりやすく紹介。

▼四六判・平均三〇〇頁／各本体一、七〇〇円

飛脚問屋井野口屋記録

全4巻

渡邊忠司・徳永光俊編

尾張領内と京都・大坂・江戸など各地域を結ぶ尾張飛脚の飛脚問屋であった井野口屋の記録。近世の飛脚史・郵便制度の資料的空白を埋める貴重な史料。

▼A5判・平均四五〇頁／揃本体四〇、六〇〇円

●●日本史●●

古代日本の衣服と交通 装う王権つなぐ道 六、八〇〇円

武田佐知子著 二〇一四年三月刊

交錯する知 衣装・信仰・女性 一、二、〇〇〇円

武田佐知子編 二〇一四年三月刊

日本古代の武具 『国家珍宝帳』と正倉院の器仗 八、五〇〇円

近藤好和著 二〇一四年九月刊

日本古代文書研究 九、二〇〇〇円

渡辺滋著 二〇一四年二月刊

九条家本延喜式 東京国立博物館古典籍叢刊編集委員会編 一五、〇〇〇円

(一)巻八～十一 二〇一二年刊

(二)巻十二・十三・十五・十六・二十・二十一 二〇一二年刊

訓讀註釋 儀式・踐祚・大嘗祭・儀世 一五、〇〇〇円

皇學館大学神道研究所編 二〇一二年刊

御堂関白日記全註釈 山中裕編 八、一〇〇〇円

寛弘元年〔復刻〕 二〇一二年刊

寛弘2年〔復刻〕 二〇一二年刊

寛弘6年〔改訂版〕 二〇一二年刊

長和元年〔復刻〕 二〇一二年刊

長和2年〔復刻〕 二〇一二年刊

寛仁元年〔復刻〕 一、一〇〇〇円

寛仁2年上〔復刻〕 二〇一二年刊

寛仁2年下〔復刻〕 二〇一二年刊

治安元年〔復刻〕 二〇一二年刊

増補改訂 兵範記人名索引 九、〇〇〇円

兵範記輪読会編 二〇一三年刊

平安貴族社会の秩序と昇進 七、八〇〇円

佐古愛己著 二〇一二年刊

平安時代貿易管理制度史の研究 七、〇〇〇円

渡邊誠著 二〇一二年刊

摂関院政期思想史研究 六、五〇〇円

森新之介著 二〇一三年刊 [日本思想史学会奨励賞]

『作庭記』と日本の庭園 五、〇〇〇円

白幡洋三郎編 二〇一四年四月刊

法制史料集 陽明叢書 記録文書篇第9輯 一、二、〇〇〇円

陽明文庫編 / 杉橋隆夫・佐古愛己解説 二〇一四年九月刊

禁裏・公家文庫研究 第四輯 九、二〇〇円

田島公編 二〇一二年刊

東寺百合文書 京都府立総合資料館編 九、五〇〇円

第十巻 子函二 二〇一二年刊

阿蘇下野狩史料集 九、五〇〇円

第十一巻 子函三 二〇一四年九月刊

飯沼賢司編 二〇一二年刊 七、五〇〇円

住心院文書 六、〇〇〇円

首藤善樹・坂口太郎・青谷美羽編 二〇一四年四月刊

日本中世の社会と寺社 七、七〇〇円

細川涼一著 二〇一三年刊

中世の契約社会と文書 七、五〇〇円

村石正行著 二〇一三年刊

中世寺院社会と民衆 衆徒と馬借・神人・河原者 七、五〇〇円

下坂守著 二〇一四年十一月刊

日本中世の領主一揆 七、二〇〇円

吳座勇一著 二〇一四年三月刊

祇園祭の中世 室町・戦国期を中心に 河内将芳著 二〇一二年刊	四、五〇〇円
日本中世の地域社会と仏教 湯之上隆著 二〇一四年一〇月刊	八、〇〇〇円
室町幕府管領施行システムの研究 亀田俊和著 二〇一三年刊	九、八〇〇円
室町幕府の東国政策 杉山一弥著 二〇一四年三月刊	七、二〇〇円
東国における武士勢力の成立と展開 思文閣史学叢書 東国武士論の再構築 山本隆志著 二〇一二年刊	六、五〇〇円
日本中世政治文化論の射程 山本隆志編 二〇一二年刊	七、八〇〇円
在京大名細川京兆家の政治史的研究 浜口誠至著 二〇一四年四月刊	六、五〇〇円
戦国大名権力構造の研究 村井良介著 二〇一二年刊	七、〇〇〇円
戦国大名佐々木六角氏の基礎研究 一、六〇〇円 村井祐樹著 二〇一二年刊	一、六〇〇円
南蛮・紅毛・唐人 一六・一七世紀の東アジア海域 中島栄章編 二〇一四年一月刊	六、八〇〇円
大航海時代の日本と金属交易 平尾良光・飯沼賢司・村井章介編 別府大学文化財研究所企画シリーズ 二〇一四年一〇月刊	三、五〇〇円
朱印船貿易絵図の研究 菊池誠一編 二〇一四年三月刊	七、八〇〇円
近世史小論集 古文書と共に 藤井讓治著 二〇一二年刊	六、〇〇〇円

京都雑色記録 第3巻 小島氏留書・五十嵐氏記録 朝尾直弘編 京都大学史料叢書 二〇一二年刊	一四、〇〇〇円
近世の禁裏と都市空間 岸泰子著 二〇一四年三月刊	六、四〇〇円
近世京都近郊の村と百姓 佛教大学研究叢書22 尾脇秀和著 二〇一四年三月刊	四、八〇〇円
一九世紀の豪農・名望家と地域社会 福澤徹三著 二〇一二年刊	六、〇〇〇円
識字と学びの社会史 日本におけるリテラシーの諸相 大戸安弘・八鍬友広編 二〇一四年一〇月刊	七、〇〇〇円
幕末期の老中と情報 水野忠精による風聞探索活動を中心に 佐藤隆一著 二〇一四年六月刊	九、五〇〇円
幕末維新期の陵墓と社会 上田長生著 二〇一二年刊	六、二〇〇円
京都の歴史災害 吉越昭久・片平博文編 二〇一二年刊	二、三〇〇円
岩倉具視関係史料 全2巻 佐々木克・藤井讓治・三澤純・谷川稯編 二〇一三年刊	二四、〇〇〇円
吉田清成関係文書 書類篇1 京都大学史料叢書一九、五〇〇円 京都大学日本史研究室・吉田清成関係文書研究会 編集解説 二〇一三年刊	一九、五〇〇円
近代日本の歴史都市 古都と城下町 高木博志編 二〇一三年刊	七、八〇〇円
近代古墳保存行政の研究 尾谷雅比古著 二〇一四年三月刊	七、二〇〇円
近代日本高等教育体制の黎明 交错する地域と国とキリスト教界 田中智子著 二〇一二年刊	七、〇〇〇円

増補改訂 **西村茂樹全集** 日本弘道会編

第8巻 訳述書4 二〇一二年刊 一八、〇〇〇円

第12巻 漢詩・書簡・語彙索引他 二〇一三年刊 一七、〇〇〇円

近代日本の倫理思想 主従道徳と国家 五、五〇〇円

高橋文博著 二〇一二年刊

憲政常道と政党政治 近代日本二大政党制の構想と挫折 七、〇〇〇円

小山俊樹著 二〇一二年刊

中華民国の誕生と大正初期の日本人 六、五〇〇円

曾田三郎著 二〇一三年刊

地域社会から見る帝国日本と植民地 朝鮮・台湾・満洲 一三、八〇〇円

松田利彦・陳延媛編 二〇一三年刊

植民地朝鮮の日常を問う 二、八〇〇円

第2回佛教大学・東國大学校共同研究 佛教大学国際学術研究叢書3

韓哲昊・原田敬一・金信在・太田修著 二〇一二年刊

大正・昭和期の日本政治と国際秩序 六、五〇〇円

転換期における「未発の可能性」をめぐって

武田知己・萩原稔編 二〇一四年十月刊

●●● **科学史・経済史** ●●●

松岡恕庵本草学の研究 七、五〇〇円

太田由佳著 二〇一二年刊

歴史における周縁と共生 女性・穢れ・衛生 六、八〇〇円

鈴木則子編 二〇一四年四月刊

医療の社会史 生・老・病・死 二、八〇〇円

京都橋大学女性歴史文化研究所編 二〇一三年刊

近代京都の施薬院 三、五〇〇円

八木聖弥著 二〇一三年刊

緒方惟準伝 緒方家の人々とその周辺 一五、〇〇〇円

中山沃著 二〇一二年刊

緒方郁蔵伝 幕末蘭学者の生涯 二、五〇〇円

古西義麿著 二〇一四年十一月刊

軍医森鷗外のドイツ留学 三、〇〇〇円

武智秀夫著 二〇一四年七月刊

近世妙心寺建築の研究 九、五〇〇円

平井俊行著 二〇一三年刊

劇場の近代化 帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場 三、五〇〇円

永井聡子著 二〇一四年四月刊

軍事技術者のイタリヤ・ルネサンス 五、六〇〇円

築城・大砲・理想都市 白幡俊輔著 二〇一二年刊

技術と文明 日本産業技術史学会編 二、〇〇〇円

第32冊 17巻1号 二〇一二年刊

第33冊 17巻2号 二〇一二年刊

第34冊 18巻1号 二〇一四年一月刊

第35冊 18巻2号 二〇一四年五月刊

第36冊 19巻1号 二〇一四年九月刊

住友の歴史 朝尾直弘監修／住友史料館編 一、七〇〇円

上巻 二〇一三年刊

下巻 二〇一四年八月刊

住友史料叢書 朝尾直弘監修／住友史料館編 九、五〇〇円

第27回 銅座方要用控三 二〇一二年刊

第28回 年々諸用留十一番 二〇一三年刊

老農・中井太一郎と農民たちの近代 七、五〇〇円

大島佐知子著 二〇一三年刊

牛と農村の近代史 家畜預託慣行の研究 四、八〇〇円
板垣貴志著 二〇一四年一月刊

ミシンと衣服の経済史 地球規模経済と家内生産 六、〇〇〇円
岩本真一著 二〇一四年七月刊

●●東洋史●●

東アジアの交流と地域展開 四、八〇〇円
北東アジア交流研究プロジェクト 藤井二編 二〇一二年刊

近世中国朝鮮交渉史の研究 六、〇〇〇円
松浦章著 二〇一三年刊

朝鮮独立運動と東アジア 1910-1925 七、五〇〇円
小野容照著 二〇一三年刊

●●比較文化・文化人類学・民俗●●

日仏文学・美術の交流 大手前大学比較文化研究叢書10 二、八〇〇円
「トロンコワ・コレクション」とその周辺

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編 二〇一四年四月刊

一九三〇年代東アジアの文化交流 二、八〇〇円
上垣外憲一編 大手前大学比較文化研究叢書9 二〇一三年刊

比較詩学と文化の翻訳 大手前大学比較文化研究叢書8 二、五〇〇円
川本皓嗣・上垣外憲一編 二〇一二年刊

翻訳文学の視界 近現代日本文化の変容と翻訳 二、五〇〇円
井上健編 二〇一二年刊

岡倉天心の比較文化史的研究 ポストンでの活動と芸術思想 二、四〇〇円
清水恵美子著 二〇一二年刊 芸術選奨文部科学大臣新人賞 一〇、七〇〇円

世界を巡る美術探検 二、四〇〇円
木村重信著 二〇一二年刊

着衣する身体と女性の周縁化 五、八〇〇円
武田佐知子編 二〇一二年刊

早池峰岳神楽の継承と伝播 佛教大学研究叢書18 四、六〇〇円
中嶋奈津子著 二〇一三年刊

日本庭園像の形成 四、〇〇〇円
片平幸著 二〇一四年五月刊

日本の食の近未来 二、三〇〇円
熊倉功夫編 二〇一三年刊

紙―昨日・今日・明日 日本・紙アカデミー25年の軌跡 二、〇〇〇円
日本・紙アカデミー編 二〇一三年刊

老舗に学ぶ京の衣食住 佛教大学四条センター叢書5 一、九〇〇円
西岡正子編 二〇一三年刊

●●宗教史●●

増補 陰陽道の神々 佛教大学鷹陵文化叢書17 二、三〇〇円
斎藤英喜著 二〇一二年刊

怨霊・怪異・伊勢神宮 七、〇〇〇円
山田雄司著 二〇一四年六月刊

蘭溪和尚語録 蘭溪道隆禪師全集1 一五、〇〇〇円
佐藤秀孝・館隆志編 二〇一四年十二月刊

名庸集 影印と解題 全3冊 三八、〇〇〇円
中本大編 二〇一三年刊

新訂 法然上人絵伝 二、八〇〇円
中井真孝校注 二〇一二年刊

法然上人絵伝の研究 九、五〇〇円
中井真孝著 二〇一三年刊

中世文化と浄土真宗

今井雅晴先生古稀記念論文編集委員会編 二〇一二年刊 一三、〇〇〇円

老僧が語る京の仏教うらおもて 九〇〇円

五十嵐隆明著 二〇一三年刊

高木仙右衛門に関する研究「覚書」の分析を中心にして 二、〇〇〇円
高木慶子著 二〇一三年刊

●●美術史・芸能史●●

写しの力 創造と継承のマトリクス 四、〇〇〇円
鳥尾新・杉子女王・亀田和子編 二〇一四年一月刊

風俗絵画の文化学Ⅱ 虚実をうつす機知 七、〇〇〇円
松本郁代・出光佐千子・杉子女王編 二〇一二年刊

風俗絵画の文化学Ⅲ 瞬時をうつすフィロソフィ 七、〇〇〇円
松本郁代・出光佐千子・杉子女王編 二〇一四年十二月刊

原本『古画備考』のネットワーク 九、二〇〇円
古画備考研究会編 二〇一三年刊

室町水墨画と五山文学 六、〇〇〇円
城市真理子著 二〇一二年刊

料紙と書 東アジア書道史の世界 五、八〇〇円
鳥谷弘幸編 二〇一四年四月刊

近代日本における書への眼差し 日本書道史形成の軌跡 四、八〇〇円
高橋利郎著 二〇一二年刊

宗達伊勢物語図色紙 一九、〇〇〇円
羽衣国際大学日本文化研究所伊勢物語絵研究研究会編 二〇一三年刊

源氏物語遊興の世界 一、〇〇〇円
逸翁美術館・池田文庫編 二〇一二年刊

源平の時代を視る 二松學舎大学学術叢書 四、八〇〇円
二松學舎大学附属図書館所蔵 奈良絵本『保元物語』平治物語を中心に
磯水絵・小井土守敏・小山聡子編 二〇一四年三月刊

月を愛でる うつろいと輝きの美 一、〇〇〇円
逸翁美術館編 二〇一四年一〇月刊

正倉院染織品の研究 二〇、〇〇〇円
尾形充彦著 二〇一三年刊

正倉院宝物に学ぶ2 二、五〇〇円
奈良国立博物館編 二〇一二年刊

大徳寺伝来五百羅漢図 五〇、〇〇〇円
奈良国立博物館・東京文化財研究所編 二〇一四年六月刊

近江の古像 九、〇〇〇円
高梨純次著 二〇一四年八月刊

仏教美術を学ぶ 三、〇〇〇円
中野玄三・加須屋誠著 二〇一四年一月刊

動物・植物写真と日本近代絵画 五、〇〇〇円
中川馨著 二〇一二年刊

通天楼日記 横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷 一六、四〇〇円
富坂賢・柏木智雄・岡塚章子編 二〇一四年四月刊

講座 日本茶の湯全史 茶の湯文化学会編 二、五〇〇円
第1巻 中世 二〇一三年刊

第2巻 近世 二〇一四年六月刊
第3巻 近代 二〇一三年刊

御茶湯之記 予楽院近衛家麴の茶会記 茶湯古典叢書6 一五、〇〇〇円
名和修・筒井紘一・熊倉功夫監修／川崎佐知子校訂 二〇一四年六月刊

片桐石州茶書 茶湯古典叢書7 一五、五〇〇円
谷晃・矢ヶ崎善太郎校訂 二〇一四年六月刊

- 藤村庸軒流茶書 顕岑院本(一) 一〇、五〇〇円
 白苔頭成著 二〇一二年刊
- 茶道望月集 顕岑院本(二) 一六、〇〇〇円
 白苔頭成編 二〇一三年刊
- 元伯宗旦の研究 七、八〇〇円
 中村静子著 二〇一四年七月刊
- 茶の湯と音楽「茶道文化学術奨励賞」 七、八〇〇円
 岡本文音著 二〇一二年刊
- 茶の湯 恩籟抄 五、五〇〇円
 戸田勝久著 二〇一四年七月刊
- 近代数寄者のネットワーク 茶の湯を愛した実業家たち 四、〇〇〇円
 齋藤康彦著 二〇一二年刊
- 茶の湯交遊録 小林一三と松永安左エ門 一、八〇〇円
 逸翁と耳庵の名品コレクション
 逸翁美術館・福岡市美術館編 二〇一三年刊
- 復活! 不昧公大圓祭 小林三が愛した大名茶人・松平不昧 一、〇〇〇円
 逸翁美術館編 二〇一三年刊
- 茶会記をひもとく 逸翁と茶会 一、〇〇〇円
 逸翁美術館編 二〇一二年刊
- 近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ 六、四〇〇円
 依田徹著 二〇一三年刊「茶道文化学術奨励賞」
- 野村得庵の文化遺産 三、〇〇〇円
 野村美術館学芸部編 二〇一三年刊
- 京都 伝統工芸の近代 二、五〇〇円
 並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編 二〇一二年刊

- 近世上方歌舞伎と堺 佛教大学研究叢書14 六、三〇〇円
 斎藤利彦著 二〇一二年刊「歌舞伎学会奨励賞」
- 京舞井上流の誕生 岡田万里子著 二〇一三年刊 九、〇〇〇円
 [サントリ学芸賞] 林屋辰三郎藝能史研究奨励賞/日本演劇学会河竹賞奨励賞
- 日中演劇交流の諸相 中国近代演劇の成立 八、〇〇〇円
 陳凌虹著 二〇一四年九月刊
- 天皇・將軍・地下楽人の室町音楽史 六、六〇〇円
 三島暁子著 二〇一二年刊[田邊尚雄賞]
- 中世後期の香文化 香道の黎明 八、二〇〇円
 本間洋子著 二〇一四年四月刊
- 森田りえ子作品集 1979-2011 二四、〇〇〇円
 森田りえ子著/梅原猛序文/草薙奈津子対談 二〇一二年刊
- 日本文学 ●●●
- 栄花物語・大鏡の研究 七、二〇〇円
 山中裕著 二〇一二年刊
- 平家物語生成考 七、〇〇〇円
 浜畑圭吾著 二〇一四年十二月刊
- 中世歌書集 龍谷大学善本叢書31 一三、三〇〇円
 大取一馬責任編集 二〇一三年刊
- 高野山正智院連歌資料集成 全2冊 二〇、〇〇〇円
 正智院監修 高野山正智院経蔵史料集成四・五 二〇一三年刊
- 日本文学とその周辺 龍谷大学仏教文化研究叢書33 八、四〇〇円
 大取一馬編 二〇一四年九月刊
- 西鶴の文芸と茶の湯 六、〇〇〇円
 石塚修著 二〇一四年二月刊

— 思文閣グループの逸品紹介 —

美の縁

び

よすが



江戸時代の寛文・延宝（一六六一〜一六八一）頃、奈良絵制作における最盛期に描かれた作品である。

本書は「布袋の栄花」または「布袋物語」と称される御伽草子を奈良絵巻二巻に仕立てたもの。実は弥勒菩薩の化身である布袋和尚が起こした種々の奇跡が語られ、最後は岩上に端座し偈を唱えて遷化したという内容である。七福神として我々の生活にも馴染み深い布袋様だが、高僧としての奇談を綴る点もまた興味深い。

上掲の挿絵はその奇跡的一幕で、布袋和尚が争う虎

◆ 奈良絵巻 布袋乃栄花 ◆

に法を説き改心させ、虎たちが和尚に花や供物を捧げている場面である。

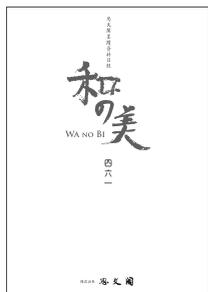
挿絵は長尺の挿絵を各巻一図ずつ交え、金泥を用いた極彩色画で、衣服・背景に至るまで丹念に描かれている。さらに詞書も金泥で瀟洒な下絵を施した料紙に認められており実に豪華な作品となっている。

本書はその美術的価値に加え、絵本・絵巻を合わせた現在五本が知られるのみの稀覯本であり、巷間に現れることは稀で、国文学的視点からも貴重な一本である。

（思文閣出版古書部・嶋根勝彦）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

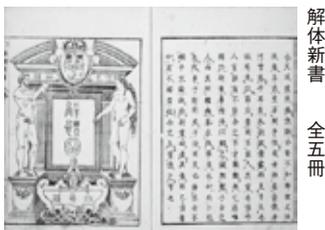
お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年4回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



解体新書 全五冊

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

スマートフォン・タブレット専用
思文閣の査定申込みアプリ



丁寧なガイダンスとカンタン操作で、査定申込みをお手伝いします。
思文閣の専門スタッフが、お手持ちの作品を丁寧に拝見、後日査定結果をお知らせいたします。

無料配信中

「美術品査定」で検索、無料ダウンロード
Available on the App Store ANDROID APP ON Google play

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
satei@shibunkaku.co.jp



ぎやらしい思文閣では、絵画や陶芸など
2015年も様々な展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

ぎやらしい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386
TEL(075)761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/